

## 書名：『幸福の経済学』

著 者：キャロル・グラハム  
訳 者：多田洋介  
出版社：日本経済新聞社  
出版年：2013年2月15日  
総ページ数：245頁

評者：佐々木 公 明  
(学 長)

本書は The pursuit of happiness : an economy of well-being by Carol Graham, The Brookings of Institution, Paperback edition, 2012 の日本語訳である。本書の主たる目的は、「幸福の研究や指標をもって政策の領域に奥深く踏み込んでいくことにどれだけの将来性があるかということと、この研究の隠れた落とし穴を議論することにある」(p.23)。本書の大きな特徴は、世界銀行、IMFなどの国際機関での著者の経歴を生かして様々な国の幸福水準を計量的に分析していることである。第3章でその成果が紹介されている。発展途上国から先進国、政治的不安定の国から安定している国、非民主的な国から民主主義が根付いている国と多様な国の人々の幸福度とその要因を分析して、どの国でも共通的な要因と国固有の要因を抽出している。

著者は「幸福の経済学」は人間の厚生を適切に評価するために必要であるという視点に立ち、厚生を評価する際に経済学者が伝統的に拠って立ってきた「顕示選好」と決別することになるとしている (p.28)。顕示選好は「人々がどう行動したか」で厚生を評価し、幸福の経済学は「人々がどう表明したか」によって評価するからである。しかし、「幸福の経済学」の正統性をより強く主張するためには、「幸福度」が個人の追及する生活目標であり、「幸福度」が適切に測定可能であり、また個人間比較も可能であることを実証的に説明することが必要である。残念ながら本書では触れていないが、経済学者である Ng, Y-K は一貫して、「序数性をもつ選好 (preference)」ではなく「基数的幸福 (happiness)」概念こそが人間の厚生を論ずるのに適切であるということ、主張してきたのであるが、本書でも是非、「幸福の経済学」の原論ともいうべき Ng の一連の著作の紹介をして欲しかったところである。

著者が本書を通して繰り返し問うていることは、我々が「幸福」というとき、それはベンサムの意味での快楽的幸福なのか、それともアリストテレスの意味での充実した人生の幸福か、ということである。アリストテレスは幸福をエウダイモニア (ギリシャ語で厚生や富を表す「エウ」、個人の運命をコントロールする力「ダイモン」の組み合わせ) と表現し、「目的があり、意義深い人生を送る機会」の意味である。「経済学者や政策立案者としての私たちにとって大事なことは充実した生活を送る機会といった特定の幸福の概念は、政策目的として追求する価値がある一方で、一時の満足という意味での幸福はそれに値しない」(p.52) と主張する。満足感は幸福にとって重要であるとしても、政策上より当たり前の目標であるべきなのは、目的のある人生を送る機会に関係した幸福の側面であり、少なくともこれが著者の強い規範的結論である。(p.101)

「幸福学」の実証研究は、人々の幸福度の調査から得られるデータを利用する。「一般的に言って、あなたの人生はどのくらい幸せですか」や「あなたの生活にどの程度満足していますか」のオープンエンドの質問が一般的であるが、ギャラップ社が導入した「考えられる最高の

人生」形式（人生の階段形式）の質問、「あなたが考えられる最高の人生はどんなものですか？（それに比べて）あなたの人生は10点満点のスケールでどの程度ですか？」という調査結果も本書では分析している。後者のいわば「人生の階段」形式の幸福度の方が自由回答形式の場合より所得と密接に相関していると結論付けられる（p.45）。幸福の定義は人によって、思想や哲学によって異なるが、著者は「幸福」は最も融通無碍で正確に定義されない、そして「あなたはどのくらい幸福か」と質問する場合も、幸福が何であるかの定義を回答者に押し付けることなく、回答者がそれぞれが幸福の概念を自身で考えることができるからこそ有意義である。「主観的厚生」は、いかようにも受け取れる幸福感や、仕事、健康、教育などの生活の多様な満足度など、人々が自分の厚生について報告するやり方の全てを包含する用語である」という視点に立つ（pp.25-26）。実際、本書では多様な国・社会のオープンエンドの幸福度調査や「人生の階段」形式の幸福度の調査のデータを用いて、幸福度を被説明変数とする「幸福関数」の推定が行われる。その分析の結果、人々の幸福の決定要因にはとても安定的なパターンがあり、所得、年齢、健康、安定的なパートナー関係、雇用、交友関係は国・社会を問わず全ての人々の幸福に、基本的には同じような重要な要素であることが分かる（p.137）。

「幸福学」研究で大きな関心と呼び、論争も起きたのは、「所得はどの程度幸福につながるのか？」という問である。これに関して最初に問題を提起した、R. Easterlinに因み「イースタリン パラドックス」と呼ばれる観察事実がある。すなわち、「平均してみれば、グループとしての高所得国は低所得国よりも幸福だが、幸福水準は、ある一定の水準までは所得の上昇に伴って上昇するものの、それ以降は伸びなくなる」（p.40）。この説明として、「ヘドニック・トレッドミル仮説」（欲求水準が所得と共に上昇するので、せっかく増加した幸福度水準がまた低下する）と「セット・ポイント理論」（「適応」が働き、所得上昇の状況にすぐ慣れてしまい、幸福度が元の水準に低下する）を挙げている。最近ではそもそもイースタリン・パラドックスが成立するかどうかの論争も起きている（p.42）。他の「幸福学」文献の多くでは別な理由「他者との比較仮説」（自分の所得が上昇しても他者の所得も同じように上昇するならば、他者との相対は変わらないので幸福水準は増加しない）もあげられることを指摘しておく。

「幸福学」研究としての本書のもう一つの大きな特徴は「適応」について考察を深めていることであり、本書を通してかなり多くの箇所、「適応」が「（報告される）幸福度」に与える影響について言及している。「人間が繁栄と苦境の両方に適応できるという驚くべき能力を持ち、同じような幸福感を維持し続けられるということも分かっている」（p.65）ことを前提として、「幸福の経済学の最も大きな課題は、調査への回答が回答者の生活環境や潜在能力、行為者性によってどの程度歪められているかを評価すること」（p.32）と幸福度を測定する上で「適応」の問題が重大であると認識している。特に、アマルティア・センの、「適応の結果である幸福」に関する批判を取り上げ、この問題の重要性を強調している（pp.83-84）。すなわち、センは「不平の多いお金持ちは、満足した農民よりも幸福でないかも知れないが、農民よりは高い生活水準を享受している（p.137）」ことを隠蔽し、「適応」が強いならば幸福指標は人間の「真の」福祉水準を表現しない恐れがあることを警告しているのである。

著者は「適応能力は個人々の心理からみれば良いことかもしれないが、適応能力が世界各国の幸福度を決定付けるのに果たす役割は複雑である。何が我慢できて、何が我慢できないかの規範が国間で異なる。適応能力の違いを理解することで人々の幸福に関する理解は確実に広がる。しかし、例えば極貧だが幸せなインドの農民と裕福だが惨めなニューヨークの弁護士の回

答をどう比較すればよいのか？」(pp.138-140)と「適応」のもたらす両面を指摘している。国ごとの適応能力の違いの一例は、アフガニスタン人は客観的な状況が世界の平均よりもずっと厳しいものであるにも関わらず、(オープンエンドの幸福度調査によると)世界の平均より幸せであるということである。この“矛盾”を是正するために、「あなたが考えられる最高の人生はどんなものですか？(それに比べて)あなたの人生は10点満点のスケールでどの程度ですか？」という質問をした調査結果に拠ると、アフガニスタン人の回答は世界の平均よりも低くなる。つまり、「適応」の影響を取り除いた、“純粋な”「幸福度」を測定するために、「人生の階段形式」の質問が有効であることを示唆している。このことは本書の大きな功績であると評価される。

「適応」に関する本書の結論は、「適応の役割と、人々が適応した後の期待値のために特定の幸福の形態を選択するか否かはまだ答えのない問題であり、将来の最もやりがいのある研究課題の一つである。個々のレベルでは苦境への適応能力は少なくとも苦境の中でも心理的な厚生を保全する観点からは前向きな特性である。しかし、適応能力によって社会全体そして悪い均衡に甘んじることにもなりかねない」。(p.168-169)のである。最後の心配こそが、上述のアマルティア・センが「幸福」による厚生の評価を批判するときの内容でもある。

人間の厚生水準を測る福祉の指標として、マブール・ハックとアマルティア・センが1990年に開発した人間開発指標(HDI)があるが、完全のものではない。よく定義された頑健な指標が重要で、シンプルであることも重要である。幸福関数は所得を一つの変数にすることにより、様々な現象の価値を所得単位で計算することができるというメリットがあるので、幸福関数の精緻化も追及する価値がある。結局、「私たちが計測すべきもの、そしておそらくは政策目的として目指すものという意味での集計量としての概念について同じようなコンセンサスは未だ形成されていない」(p.199)が本書の結論である。

以上、本書は多様な国のデータによる幸福関数に関する豊富な実証分析に基づき、人間の幸福水準に与える共通の要因を抽出し、同時にそれぞれの社会に固有の要因も明らかにしている。まさに実証分析に裏打ちされた「幸福学」研究書であり、今後この分野の必読書になるであろう。さらに、「適応」が報告される幸福度に与える影響について、他に類を見ない詳細な分析を行っており、「幸福学」の新たな課題を明示していることは、大きな貢献である。